

<原著>

精神保健福祉援助実習における実習評価と外向性および 神経症的傾向との関連

柴原 直樹・井澤 嘉之・山田 州宏

Relationships in Psychiatric Social Worker's Training between Evaluations by a Supervisor and Extroversion and Neurotics Tendencies of Student Apprentices

Naoki SHIBAHARA, Yoshiyuki IZAWA, Kunihiro YAMADA

The purpose of this study was to investigate relationships in Psychiatric Social Worker's training between evaluations by a supervisor and extroversion and neurotics tendencies of student apprentices measured by the MPI. In total, 177 university students took part in this study. The results showed that the evaluations by supervisors were not correlated with the E scores or the N scores, and that the self-evaluations of student apprentices were correlated with the E scores.

Key words : PSW, extroversion, neurotics tendency, practice evaluation sheet
精神保健福祉士、外向性、神経症的傾向、実習評価表

はじめに

精神保健福祉援助実習における学習目標には、机上で学んだ知識や技術の理解を、実習体験を通して深めるとともに、それらを活用し精神障害者に対する相談援助やリハビリテーションに必要な資質や能力の向上を図ることが含まれている（大西、辻丸、藤島ら、2008¹⁾ 参照）。特に、現場実習を通して精神障害者と直接関わることで、精神障害者の生活上の実態を知り、彼らにとっての困難とは何かについて考えるとともに、彼らのニーズについて理解を深め、彼らの置かれている現状を把握することは、精神保健福祉士を目指す実習生にとって極めて重要なことである

（荒田、2001）²⁾。

このような実習生への実践的教育に対し、実習の事前学習の中で学生が問題なく実習を終えることができるかを判断し、その力量を評価することは、実習生を送り出す実習担当教員にとって重要な責務である。実習を行う上で必要なことは、学生の知識・技術レベルの向上だけではない。実習先での指導員との友好的人間関係や利用者との円滑なコミュニケーション能力といったものも現場実習において重要な役割を果たすものと考えられる。そのため、実習生の持つ性格特性や社会的スキルについて予め知っておくことは、実習担当教員にとって学生の指導上必要なことと思われる。

表1. 調査対象となった男女別学生数

年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014
男性	21	20	4	10	5	9	2
女性	20	21	21	14	17	11	2
計	41	41	25	24	22	20	4

表2. 精神保健福祉援助実習評価表

(評価点の参考基準) A 優れている B 良好 C 普通 D 努力を要する	
評価のポイント	評価点
1. 専門職としての倫理(人権擁護、守秘義務の尊重等の義務)をわきまえて行動できた。	
2. 仕事上の責任・実習期間を通し出退勤時間・規則の遵守・連絡・報告等・がよくできた。	
3. 常に積極的、主体的に学習する姿勢があった。	
4. 本人の設定した課題に対して積極的に取り組んでいた。	
5. 実習指導者の指導助言を真面目に受入れ、それを活用しようとする姿勢があった。	
6. 実習施設・機関等の目的及び機能をよく理解して行動した。	
7. 利用者を理解し、ニーズを把握することができた。	
8. 利用者に対して適切な援助ができた。	
9. 集団に対して適切な援助ができた。	
10. 実習記録をはじめ各種記録を適切に取り、整理・保管・活用した。	
11. 自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した。	
12. 実習施設・関連施設の職員等とよい協力関係を作ることができた。	
13. 総合評価(上記の1～12の各評価の総合評価として)	

では、実習指導者と友好な人間関係を築き上げる性格特性とは何であろう。一般に、対人関係における好ましい性格には「誠実」、「正直」、「理解のある」などの特性が挙げられている(Anderson, 1968)³⁾が、他者と良好な関係を築くためにはお互いが相手に対し好意的な感情を持つことが重要であることも指摘されている(水野, 2003⁴⁾)。特に、魅力ある異性像として明朗で活発な人物が上位に来るという松井、江崎、山本(1983)⁵⁾の報告や、外向性はコミュニケーション能力などの社会的スキルと高い関連性を持つという研究結果(菊池, 1988⁶⁾; 菊池・堀毛, 1994⁷⁾; 水野, 1997⁸⁾)から、現場実習においては外向的な性格特性が好意的に受け取られ、それが実習先の指導者や職員との良好な関係を築く要因

の1つである可能性が示唆される。

他方、情緒不安定な性格傾向を持つ者ほど、ストレスの多い場面で相手を無視するなど、対人関係を放棄・崩壊させるような行動をとったり(加藤, 2000⁹⁾; 高橋、本江、古市ら, 2011¹⁰⁾)、その解決として問題の原因を誰かのせいにしたり、問題に関係する人を責めたり、問題のない人に八つ当たりするなどの消極的コーピングを選択してしまうことが指摘されている(近村、小林、石崎ら, 2007¹¹⁾)。つまり、神経症的傾向が高いほど実習指導者との人間関係に悪影響を及ぼし、利用者とのコミュニケーションにも支障をきたすと考えられる。

このように考えると、実習生の現場実習における評価は彼らの性格特性や社会的スキル

表3. 実習評価点（項目1から13）の男女別平均値および t 値と有意確率 p

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
男性	3.07	3.06	2.75	2.90	3.17	2.72	2.52	2.61	2.48	2.79	2.62	3.10	2.89
女性	3.06	3.12	2.79	2.78	3.11	2.80	2.58	2.50	2.51	2.81	2.76	3.08	2.90
t 値	-.105	.488	.315	-.839	-.415	.629	.463	-.842	.278	.138	.985	-.106	.068
p	.916	.626	.753	.403	.679	.530	.644	.401	.781	.890	.326	.916	.946

の影響を受ける、すなわち外向性が高く神経症的傾向が低い者ほど実習指導者による実習評価が高く、逆に外向性が低く神経症的傾向が高い者ほど実習評価が低くなる傾向があると推測される。

そこで、本研究において外向性（E）および神経症的傾向（N）を測る尺度として MPI（Morsley Personality Inventory）を利用し、実習の事前学習が始まる3年次におけるE尺度およびN尺度の得点と、4年次における実習終了後の実習評価点との関係を調べることで、この推測が妥当であるか検討する。

方 法

対象者 2008年から2014年の7年間にかけて精神保健福祉援助実習に参加したK大学学生（4年生）の中で、データが利用可能な177名（男性71名、女性106名）を調査対象とした（表1参照）。

調査項目および調査方法 医療機関および非医療機関における実習指導者の実習生（4年次）に対する評価は、K大学が作成した精神保健福祉援助実習評価表（表2参照）に記載されているものを利用した。実習評価表は13項目から成り、そのうち第13項目は総合評価である。評価はA「優れている」、B「良好」、C「普通」、D「努力を要する」の4段階で行っているが、本研究においては、A = 4、B = 3、C = 2、D = 1に変換してデータ分析を

行った。また、彼らの3年次における外向性・神経症的傾向については、授業中（5月から6月にかけて）に行ったMPI（Morsley Personality Inventory）におけるE尺度、N尺度の測定結果をそれぞれの値として利用した。

結 果

実習指導者による実習評価点の男女別平均値を表3に示す。すべての評価項目において有意な性差は見られなかったため、以後の実習評価点に関する分析には性差を含めないことにする。

実習評価点

実習評価13項目間の関係を調べるために相関分析を行った（表4参照）。その結果、すべての項目間で高い正の相関がみられた。特に、総合評価（第13項目）と相関が高かったのは11項目「自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した」と12項目「実習施設・関連施設の職員等とよい協力関係を作ることができた」であった。

さらに、実習の総合評価に対し、他の12の評価項目のうちどれが影響力を持っているか明らかにするために、項目13「総合評価」を目的変数とし、それ以外の12項目を説明変数とするステップワイズ法による重回帰分析を行った。その結果、項目3、6、7、9、10、11、12の7項目が実習の総合評価をよく

表4. 13項目間における実習評価点の相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
1	1	.685**	.578**	.599**	.704**	.674**	.629**	.582**	.608**	.672**	.670**	.680**	.707**
2		1	.574**	.593**	.674**	.565**	.556**	.489**	.486**	.705**	.619**	.615**	.688**
3			1	.762**	.666**	.628**	.669**	.513**	.570**	.598**	.608**	.630**	.772**
4				1	.692**	.658**	.660**	.569**	.628**	.676**	.673**	.622**	.762**
5					1	.673**	.656**	.565**	.615**	.702**	.721**	.763**	.784**
6						1	.769**	.649**	.743**	.594**	.688**	.709**	.779**
7							1	.753**	.757**	.565**	.657**	.678**	.780**
8								1	.839**	.463**	.638**	.653**	.702**
9									1	.518**	.696**	.699**	.758**
10										1	.733**	.612**	.746**
11											1	.740**	.829**
12												1	.801**
13													1

** $p < .01$

表5. ステップワイズ法による重回帰分析の結果

実習評価			
$F(7, 159) = 146.75, p < .001$			
$R = .931$			
$R^2 = .866$			
評価項目	β 係数	t 値	有意確率
項目11	.224	4.108	.000
項目3	.249	5.776	.000
項目6	.102	1.918	.057
項目12	.168	3.328	.001
項目7	.114	2.115	.036
項目10	.141	3.172	.002
項目9	.108	2.125	.035

説明する変数であることが分かった（表5参照）。

外向性（E）・神経症的傾向（N）および実習評価との関係

MPIにおけるE尺度およびN尺度の男女別平均値は、E尺度では男性23.7（SD = 12.60）、女性23.1（SD = 11.69）、N尺度では男性26.0（SD = 12.52）、女性28.2（SD = 11.76）であった。E尺度（ $t = -.314, p > .05$ ）およびN尺度（ $t = 1.180, p > .05$ ）において有意な性差はみられなかった。

また、E尺度およびN尺度との間に有意な負の相関関係が見出された（ $r = -.380, p < .01$ ）。つまり、外向性が高まれば神経症的傾向が弱まり、逆に内向性が高まれば神経症的傾向が強まる。しかし、この外向性および神経症的傾向と実習評価13項目との間に有意な相関関係は検出されなかった（表6参照）。

MPIにおける9つのカテゴリー

MPIでは、外向性が低いとE⁻、普通ならE₀、高ければE⁺と表記し、同様に神経症的傾向は低ければN⁻、普通ならN₀、高ければN⁺と表記する。これらE尺度3タイプ（+ 0 -）とN尺度3タイプ（+ 0 -）の組合せから、性格特性を9つのカテゴリーに分類している（詳しくは資料1参照）。

表7に示すように、全体の約4分の1がE⁻N⁺に属している。また、一番少ないのがE₀N⁻で4.5%しか属していない。図1は、それぞれ9つのカテゴリーの中で、実習評価（A, B, C, D）の割合がどうなっているか示している。それによると、一番多いE⁻N⁺に属している実習生も、一番少ないE₀N⁻に属している実習生も、それぞれの評価の割合はほぼ同じとなっている。つまり、特定のカテゴ

表6. 実習評価13項目と外向性（E）と神経症的傾向（N）との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
E	.016	.033	.062	.139	-.039	.020	.029	.084	.034	.000	-.053	.089	.010
N	.063	-.007	.062	.029	-.005	.021	.034	-.020	.061	-.058	.083	.007	.042

* $p < .05$

** $p < .01$

表7. MPI における 9つのカテゴリーのそれぞれに属する調査対象者の割合（％）

カテゴリー	E ⁻ N ⁻	E ⁻ N ₀	E ⁻ N ⁺	E ₀ N ⁻	E ₀ N ₀	E ₀ N ⁺	E ⁺ N ⁻	E ⁺ N ₀	E ⁺ N ⁺
％	7.9	6.8	24.3	4.5	5.6	14.1	15.3	11.9	9.6

リーに属する者が実習指導者から高い（あるいは低い）評価を得ているというわけではないことが分かる。

考 察

山本、服部、宮沢（1998）¹²⁾ は、一般女子学生と比べ、看護学生の性格には外向性が高く神経症的傾向が低いという特徴があることを報告している。看護学生と同様に、対人援助を軸とする PSW 資格取得に向けて勉強している学生にも同じ傾向がみられるのではないかと推測できる。そこで、本研究において、PSW 実習生に対する実習指導者の評価は、実習生の外向性や神経症的傾向などの性格特性の影響を受けるという仮説を立て調査を行った。しかし、本結果はこの仮説を支持するものではなかった。

水野（1999）¹³⁾ は、外向性と好意的感情の間に関連性はなく、むしろ「協調性」が好まれる性格特性として大きな役割を果たすこと、そして外向性に対する好意的認知は、とりわけ協調性が介在することによって生ずるみかけ上のものであると指摘している。したがって、外向性よりも協調性が実習指導者や精神障害者との対人関係を良好にし、それが実習評価に影響していた可能性もある。

神経症的傾向は、生活上でのストレス体

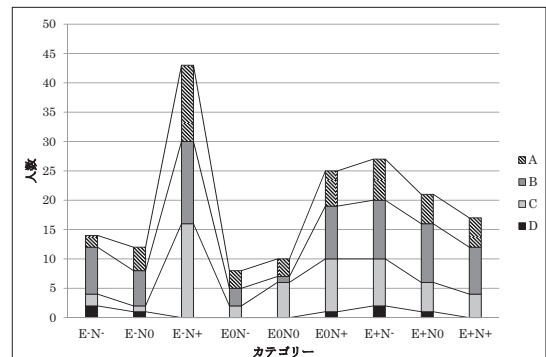


図1 MPI における9カテゴリーの中でそれぞれの実習評価点（A～D）の占める人数

験をうまく処理することが困難で、睡眠の質の低下をまねく要因（加納、石橋、土居、2014¹⁴⁾）と考えられている。これが原因で生活リズムが乱れ、実習指導者や精神障害者との人間関係の悪化や、実習生に対する実習評価の低下をもたらすと思われたが、本結果はこれと一致しなかった。一般に、神経症的傾向の特徴には、①自己内省的で、②感受性が強く、③几帳面で、④忍耐強いという長所がある。実習の総合評価(第13項目)に11項目「自分自身の性格・行動傾向についてよく自覚し、洞察しながら実習した」が大きく影響していることが見出されたが、この項目は神経症的傾向の長所と関連している。したがって、神経症的傾向（ある程度の）における性格特徴の長所が実習評価に良い影響を及ぼした可能性も否定できない。

表8. 実習評価13項目の自己評価と外向性（E）と神経症的傾向（N）との相関

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
E	.152	.169*	.286**	.185*	.290**	.239**	.102	.332**	.346**	.061	.202*	.344**	.223**
N	-.080	-.031	-.075	.011	-.132	.009	-.034	-.053	.004	.008	-.083	-.030	-.051

* $p < .05$ ** $p < .01$

Follow-up 調査

ところで、看護実習生にとって精神疾患をもつ患者とのコミュニケーションがうまく図れず、彼らとのよりよい人間関係の構築に支障をきたす場合、実習の自己評価や適応感の低下を招くという報告がある（高橋、鹿村、須藤、2005¹⁵⁾；高橋、柴田、鹿村、2006¹⁶⁾）。つまり、実習生の外向性や神経症的傾向といった性格特性が実習指導者の評価には影響しないが、実習生自身による自己評価に影響を及ぼす可能性がある。そこで、実習評価の13項目に対する「自己評価」とMPIにおけるE得点およびN得点との関係を、自己評価データが利用可能な147名を対象に follow-up 調査をした。

その結果、E得点と評価項目2、3、4、5、6、8、9、12、13との間に有意な正の相関がみられたが、N得点に関してはすべての評価項目との間に有意な相関関係は見出されなかった（表8参照）。これは、実習生の外向性が高くなれば（低くなれば）実習の自己評価は高くなる（低くなる）傾向があることを示している。特に、項目8、9、12との相関が高かったという結果は、「外向性」が実習指導者や精神障害者とのコミュニケーションが円滑に進み、彼らとのよりよい人間関係が築かれたと感じさせる要因であることを示唆している。

この follow-up 調査の結果から、外向性は実習指導者の評価に影響しないが、実習生自身による自己評価にはある程度影響を及ぼすことが示された。

引用文献

- 1) 大西良、辻丸秀策、藤島法仁、占部尊士、大岡由佳、末崎政晃、福山裕夫：精神保健福祉援助実習前後での実習生のコミュニケーション技術の評価分析、久留米大学文学部紀要、社会福祉学科編、8、39-48、2008
- 2) 荒田寛：精神保健福祉援助実習」への期待と今後の検討課題 『精神保健福祉』Vol. 32 No.1 通巻45号、p.9、日本精神保健福祉士協会、2001
- 3) Anderson, N. H.: Likable ratings of 555 personality-trait words. *Journal of Personality and Social Psychology*, 9, 272-279, 1968.
- 4) 水野邦夫：対人場面における好意的感情と外向性の関連について－外向性は「好ましい性格」か？－、聖泉論叢、11、13-25、2003
- 5) 松井豊、江崎修、山本真理子：魅力を感じる異性像－同性の推測と実際とのズレ－日本社会心理学会第24回大会発表論文集、44-45、1983
- 6) 菊池章夫：思いやりを科学する、川島書店、1988
- 7) 菊池章夫・堀毛一也：社会的スキルとは社会的スキルの心理学、川島書店、2-22、1994
- 8) 水野邦夫：対人関係における外向性の直接的効果について、聖泉論叢、5、63-75、1997

- 9) 加藤司：大学生用対人ストレスコーピング尺度作成、教育心理学研究、48(2) 225－234、2000
- 10) 高橋ゆかり、本江朝美、古市清美、香月毅史：精神看護学実習における看護学生の対人ストレスコーピング、上武大学看護学部紀要、6 (2) 9－19、2011
- 11) 近村千穂、小林敏生、石崎文子、青井聡美、飯田忠行、山岸まなほ、片岡健：看護臨床実習におけるストレスとコーピングおよび性格との関連、広島大学保健学ジャーナル、7 (1) 15－22、2007
- 12) 山本有紀、服部卓、宮沢君子：看護学生のストレスに関して、群馬保健学紀要、19、77－80、1998
- 13) 水野邦夫：対人的好悪感情と対人認知の関連について、聖泉論叢、7、55－68、1999
- 14) 加納友香、石橋知幸、土居礼佳、藤井沙紀、野口佳美、森本美智子：大学生の生活上のストレス、神経症傾向、不眠へのこだわりが睡眠の質に及ぼす影響およびそれらの精神的な健康への影響度、日本看護研究学会雑誌、37、4、1－10、2014
- 15) 高橋ゆかり、鹿村真理子、須藤絹子：看護学生の臨地実習におけるコミュニケーションの良否に関わる要因、群馬パース大学紀要、1、19－26、2005
- 16) 高橋ゆかり、柴田和恵、鹿村真理子：看護学生の実習適応感に関する研究(第3報)－実習適応感に影響を与える要因の分析、群馬パース大学紀要、2、255－262、2006

資料1 E・N 得点の高低による性格像

カテゴリー	性格像
E ₀ N ₀	比較的普通に見られる平均的な性格像。ただし、「平均的性格」の意味は、統計的な概念であるから、様々な下位型があることに注意せねばならない。
E ⁺ N ₀	N 得点が正常範囲にあるが、E 得点が高い傾向にある。この傾向を示す人は、新しい事業や環境、他人ともあまり抵抗なく馴れることが可能であるし、仕事の能率やテンポも早い。比較的話好きな傾向を持ち、人の世話を好む。現実によく適合し、思考内容も現実的であることが多い。 ① N 得点がやや高い 思慮深く現実的に物事を処理し、積極性があり責任感が強く指導的な立場にある。 ② N 得点が低く E 得点が高い 陽気で単純に現実には適合し、比較的享乐的な生活を好む。軽率、早合点、無遠慮など。 ③ N 得点も E 得点も高い 外向性が強いので独走しがちで疲労しやすくなる。
E ⁻ N ₀	口数が少なく、控え目で、人を非難するような傾向は少なく、極めて真面目である。与えられた仕事に黙々と励み、落度が少なく、かなり恒常性を持っていて感情が激したり、狭く立ち回ることをあまりしない。わがままな傾向はなく、指導的な立場に立てば率先して自らの実行力で他者の範となる。しかし、立案力や社交性が乏しいので、自分に無理をかけすぎて疲労してしまうこともある。また、時には他人に気兼ねしすぎるから、とまどうような場合も見られる。一方、上司や先輩のもとで活動する場合には、よく協力者であり信頼のおける実行者といえる。 ① E 得点がかかなり低い 対人関係上、初対面の印象がかかなり悪い場合がある。 ② N 得点がやや高い 自分自身で悩むことも多くなり、友人を作りにくかったり、人前で緊張しやすかったり、消極的になりやすかったりするマイナス面も際立ってくることもある。
E ₀ N ⁻	神経質、不安傾向、抑うつなどの神経症的傾向は弱い、外向性は中程度に保たれているから、落ち着いたこだわりの少ないタイプ。対人関係ではあまり問題のない程度の際を保つことができるが、関心を持つテーマの幅が狭い傾向にある。粘り強く、人格の芯の厳しさといったものが秘められている。このタイプにはあまりこだわりを残さない型と、自己中心的で反省の少ない型に分けられる。
E ⁺ N ⁻	神経質でなく、劣等感、不安感が少なく、対人関係では大胆で能動的である。しかし、じっくり物事を深く考えることはあまりしない。与えられた仕事に対してのテンポは早く、きびきびと仕事を消化する。誰とでもよく友人になり、気軽である。全体として、人のよさ、世間知らず、付和雷同型に通ずる面もあるし、わがままなこともある。交友関係にある人や信用する人に対しては義侠的な行動にでることも少なくない。 ① N 得点が低過ぎる 内省力が乏しい。 ② E 得点が高過ぎる 主観的で自我を押し通し、融通性がなく敵を多く作ってしまう。 ③ L 得点が高い 物事に対する割り切った考え方や内省力の乏しさとも関連。
E ⁻ N ⁻	社交性、外向性の乏しさから、人前で固くなり易く未知の人と打ち解けにくい、はにかみを伴ったもので冷たい感じの打ち解けにくさは異なる。控え目で支配的でないから、自分で立案したり他人をリードしたりするようなことは苦手で、黙々とした実行者のタイプである。時として、消極性や被支配性に悩むこともあるが、気分の動揺も少なく呑気な傾向も強いので内的葛藤を起こすこともあまりなく、それなりに安定したタイプである。しかし、非活動性、消極性鈍重さが強くなり過ぎると、問題を起こす可能性が大きくなる。
E ⁺ N ⁺	活動的で支配性も強く、物事を処理するテンポも早い、かなり敏感な面を持っていて悩んだりする、あるいは気分にもうらが出たりすることが多いといえる。しかし、それだけに、全体として一つのまとまりを持った性格となり得る。また、客観性や協調性に乏しくなると、一方的に自分の支配性や行動に走ることも稀にはある。しかし、どちらかという、陽気になったり塞ぎこんだりすることの方が多い。神経症に移行する可能性は常にある。
E ₀ N ⁺	適度の社交性を持っている。日常生活では、多少とも心气的であったり、仕事や対人関係での過敏性などが存在したりする。神経質、敏感、不安、苦労性などの傾向が強いし、時には被協調性、自己中心的になることもある。 ① N 得点が35以上 医学的な対象として検討を要する。
E ⁻ N ⁺	一般に、敏感で反応を起こしやすく、あまり機転を利かせて立ち回ることがなく、小心である。正直、真面目、責任感の強さとして現れるプラスの面と、反応を起こしやすく、時には抑うつつになったり、仕事のテンポが遅くなったりして、戸惑って応用の利かないマイナス面を持っている。神経症への発展を常に内蔵している。 ① E 得点が極度に低下 対人恐怖・赤面恐怖などの状態を持つこともある。自己中心的な変わった印象を人に与えることも多い。時には、表面的で無頓着過ぎるとの印象が持たれることもあるが、これは本人の内面的な具区雑な心的葛藤に由来している。 ② N 得点が40を超える どこか変わっているという印象がはっきりとしてくる。精神医学的な対象となる。